

## サモア沖津波発生後の診療体制

トンガ海溝から発生した6メートル余りの津波被害から間もなく、被害の最も大きかったサモア独立国南東部の病院には、陸路・空路を通じて支援物資や人材が押し寄せた。その一方で、現地の新聞は安置場所のないご遺体が横たわる通路や、行方不明者を探す家族、流されてきたガラスやトタンで傷ついた外傷患者でごった返す外来の様子を伝えていた。地方病院で対応できない重症患者は、首都の国立病院かニュージーランドに搬送され、国立病院では、臨時の「津波病棟」を開設して、26日間の診療とケアを行った。

## 被災地にある地方病院の対応

津波発生からしばらくの間、地方病院では下痢や呼吸器感染症、インフルエンザの患者があふれた。病院にはニュージーランドに移住したサモア人看護師や、海外の看護師ボランティアが数多く応援に駆け付けた。同時に、サモア国政府は予防接種キャンペーンや抗生剤のプロトコール冊子の配布によって、いち早く感染症の蔓延予防対策をとった。多くの開発途上国では、地方病院に医師が常駐しているとは限らず、看護師が必要な薬品を処方する。診療室の壁に掛けていた、まだ真新しいそのプロトコールには、小児と成人向けの津波後の合併症対策や、創傷の感染部位に対する積極的なデブリードメント（メスやハサミを用いて組織を切除する処置）が推奨されていた。津波被災約1か月後に訪れた病院では、このような早期の対策によって感染症が制圧できたことへの満足感と、次々と届く配給物資、そして支援者やマスコミへの対応に沸いていた。しかし、このように物資や人材が集まる一方、被災後の中期・長期的に予測される健康問題には、まだ対策が及ばない印象があった。

## 津波発生1年後に地方で行われていた看護

約1年後の訪問時点では、住民の間で、波とともに細かい砂や塵埃を吸い込んだ「津波肺」が問題となっており、地方病院の外来では激しくせき込み、吸入療法に通う患者の姿が認められた。津波後のトラウマへのケアや外傷後のリハビリなどの必要性は、被災後1か月時点から既に指摘されていたが、看護師は外来や訪問での日常的な疾病の診療行為に忙殺されていた。そんな中でも被災後の地域で行われている看護について紹介いただく機会を得ることができ、国立大学の看護学部が地域での訪問実習という形で行う、被災後の避難民の健康アセスメントに参加させていただいた。具体的に、被災後の暮らしはどのようなものか、家族員にどのような健康問題が生じているか、など各学生グループに1名の看護師が同伴する形で訪問インタビューや健康診断が行われた。しかし、その結果がその後の看護活動にどのように反映されるか、までは見届けていない。住み慣れた海岸線を離れ、山間部に移り住んだ人々が抱える生活の困難さや、健康問題の特徴はどのようなものかをまず把握し、被災後、中期・長期の看護活動に反映できる方策を共に模索できないかと考えている。



伝統的な家庭への訪問による看護処置